

CG集

地味娘の

薬漬け計画

~体験版~





地味娘の
薬漬け計画

始まりは、少し前の出来事からだった。

「すみません、ここ、借りてます」

夕方、私が職務を終えて着替えをしに戻った時のことだった。用務員室の隅で一人の生徒が体育座りをして本を読んでいた。

その子は「涼澤ゆき」と名乗った。

この用務員室は今は殆ど使われていない旧校舎の一室。

人気の無い場所を探していたらここを見つけたそうだ。

校舎内とはいえ、もう夏も本番といった時期に

エアコンの無い空き教室に居座るのは辛かったらしい。

「私、家にも学校にも居場所が無いんです」

私は学校が閉まる時間までに帰ることを約束に、

教師に黙っていることにした。

その日を境に、昼休み、夕方と

ゆきは文庫本を片手に用務員室を訪れることになった。

校舎内の雑務を終え用務員室に戻ると先客がいた。

「…こんにちは」

ゆきはいつも通り用務員室の隅で本を読んでいたようだった。

「お仕事、お疲れ様です」

無表情、無口ながらも

挨拶はしっかりしてくるいい子なのだ。

ゆきがここに通い始めて半年くらい経つ。

最初に来たのは夏頃で、陰鬱そうな顔が

照りつけるような太陽と正反対だな、と思ったのだ。

「あの、何か」

私は長い時間ぼーっとゆきを見つめていたようだった。

慌てて顔を逸し、いや着替えをね、と苦し紛れに呟く。



用務員室というものがあるというのに、ゆきが通い始めてから私は隣の空き教室で着替えをすることになったのだ。

追い出すのはこちら側のはずなのに、何故かこのゆきという子は妙な威圧感があって話しかけることすら躊躇ってしまふのだ。

私服を手に取り、空き教室へ向かおうとする。

「あの」

するとふいに後ろから声をかけられた。

「私、用務員さんにはお礼をしなければならぬと思うんです」



「…え？」

一瞬淫猥な想像をしてしまった。

ゆきのスカートが露わな状態になっていることに気がついたのはその時だった。

「そ、そんな、気にしなくていいんだよ。」

どうせ君はここで座って本を読んでいるだけなんだから意識してしまうと、頭より先に体の方が反応してしまう。

頬が熱くなってきた。

私は事務机に置かれた冷めたお茶を手に取り、

一息で飲み干した。

「用務員さんは…奥さん、いらっしゃるんですか」

「いやいや生まれてこの方独り身だよ」

「ああ…そうだったんですか…ふふ」

ゆきは意味ありげに含み笑いをする。





この子、いつもよりよく喋るな、と思った時には既に遅かった。

手にしていた湯呑みがすり抜けて落ちる。

湯呑みが割れる音が歪んで聴こえる。

床に割れて散らばった湯呑みを拾おうとするも、
上手く動くことができない。

脳みそに走る甘い快感。

舌にこびりつくケミカルな味。これは一体…？

「大丈夫です、合法ですから」

「一緒にお薬で気持ちよくなりましたよ」

気がつくくと、私はゆきに手を引かれて隣の空き教室に来ていた。

当然のことながら暖房が効いておらず寒いはずなのだが、何故か体が異常に暑くこのくらいの温度の方が丁度いいくらいだと感じた。

頭に靄がかかったようになっていて何も考えられなくなっていた。

「一応：もう一つ、念押しで飲ませておこうかな」
微かに聞こえるゆきの独り言も、何か言っているのは聞き取れるが何を言っているのか理解することができなかつた。




「用務員さん、用務員さんこっちです。」
ゆきは舌に錠剤のようなものに乗せていた。



ちゅちゅ

ちゅちゅ

ちゅちゅ



ゆきが不慣れそうにキスをしてきた。
そして、にゆるりと舌を挿入され、
強引に舌を絡められた。

先程飲んだお茶のような味がする。

「はい：ごっくんしてください」

「ご：くん：」

何が起こっているのか。

頭は考えることを放棄したかのように

冬空の曇天のごとく重くなっていた。

唾液を一回飲むごとに体の芯が熱く燃えるようだった。

「用務員さん、体：あつうい：」

ゆきもそう言っているのだから実際熱いのだろう。

ゆきは徐ろにセーターを脱いだ。

発育のいい胸が自己主張するように顕になる。

そして、ブラウスのボタンを外し、

器用にブラジャーだけ脱いだ。

そしてパンツにも手をかけ見せつけるように

ゆっくりと脱ぐ。

女性の体の大事な部分が丸見えの状態になっていた。




「まさか、用務員さん
童貞なんていいませんかよね？」

いつの間にかゆきは私の目の前に来ていた。
立てなくなって座り込んだ私をゆきが見下ろす。
それも、女性器をこれでもかというくらいに広げて。
頭は回っていないはずなのに、本能が反応したのか
私の逸物はこれでもかというほど勃起していた。

「なんかもう私、用務員さんと普通に過ごしてるの
飽きちゃったので、一步踏み出しちゃおうかなあと」

「大丈夫ですよ、この薬に依存性はありませんかから」

「依存性があるとしたら：性的なことの方が強いかも…ふふっ」



「それでも本番は初めてですけど。
どうせだったら…
私の初めてはやさしいやさしい
用務員さんにあげちゃいますよ」

「あはっ勃ってるー。
用務員さんでも性欲はあるんですね」
「……ってあれ、さっきから無反応ですけど…
もしかして薬に弱いタイプですかね。
頭回ってないのかな」
「私はこの薬使って何回も自慰をしたので
慣れちゃいましたよ」



「まあ、その様子じゃあ
まともに動けなさそうですし
煽るだけ煽ってそのままあれですよね」
「…って言うてる側から…」

私はゆきの性器に釘付けになり、
つなぎの上からだというのに
いきり立った物をしごいていた。
最早私は本能に従う獣となっていた。

「私が脱がしますから
落ち着いてくださいよ…ふふふっ」

ゆきは私のつなぎを脱がせると
豊満な乳房で私の愚息を柔らかく包み込んだ。

そして丁寧に丁寧に先端を舐め、
唇で甘く食む。

はぁっく

こんなあっさり
上手くいくなんて
この人どれだけ免疫ないんだろ

異常に勃起した愚息は
遠慮をすることを知らず
ゆきの口内をこれでもかというくらい
犯していった。

…腰がやけに動いてしまう。

ゆきが毛繕いをするように
先端を舐ると
それに合わせて勝手に腰が動くのだ。

おにいちゃん

おまこ

おまこ

おまこ

あま

あま

自分の意思とは関係なく
勝手に先端から先走った汁が
出てきた。
ゆきはそれも丁寧に丁寧に
舐め、吸い取る。

我慢汁出たあ…
おいしい…

あー♡
ちよん♡
あー♡
ちよん♡



ゆきの鼻息が荒くなる。
何か興奮することでも
あったんだろうか。
鼻息が敏感なところに
あたってくすぐったい。

臭いすごい...



私は耐えきれず射精をした。
これまで見たことがないくらいの
おびただしい量の精液だった。
しかしそれでもゆきは
口で私を犯し続けた。

（3）

いっしょに

いっしょに

いっしょに

いっしょに

いっしょに



二度目の射精は一度目より
緩やかだったが、
それでもゆきの谷間から
流れ出る量を見るに
尋常ではない精液だった。



ちゅーっ♡

ちゅーっ♡

ちゅーっ♡

ちゅーっ♡



ゆきが私の精液をこれでもかと
口に入れては見せ飲む様を
ほーっと見ていた。
そしてそれを見ているうちに、
私の頭が起床した。



き、君は一体
何をして…！

あ…♡今更
気が付いたんですか

でももう遅いですよ♡

それにまだあなたは
立てないはずですよ

動けないあなたを
もっともっと
あなたを貪りますから♡

ふっ♡
ふっ♡
ふっ♡





地味娘の

薬漬け計画

毎日陰鬱そうな顔をしている地味娘が

基本CG14枚

冴えない中年用務員さんを薬漬けにして逆し手にするCG集 中央分離隊/雨宮ミズキ



大人しくて真面目そうに見える

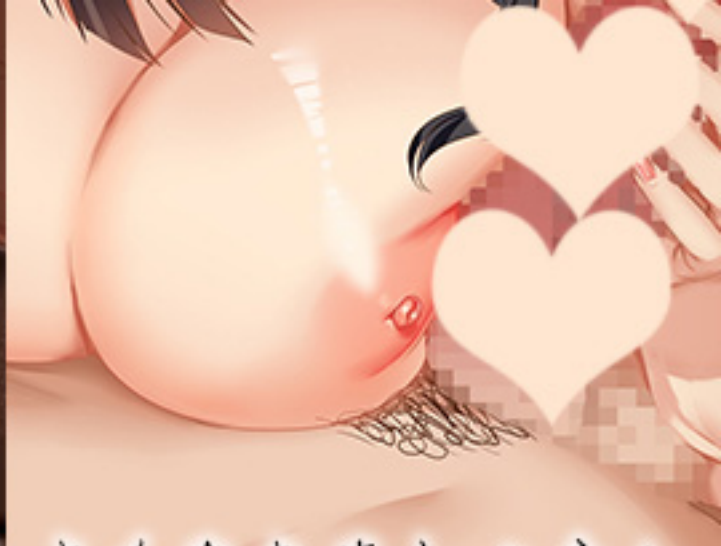
地味系な女の子が用務員さんを

薬漬け→セックス漬けにして

逆レイプしたり性奴隷にしたり

キマった用務員さんが獣のように

セックスをしたりするCG集です



「お薬と一緒に気持ちよくなりましょう」



異常に勃起した愚息は
遠慮をすることを知らず
ゆきの口内をこれでもかといくら
犯していった。

…腰がやけに動いてしまう。

ゆきが毛繕いをするように
先端を舐ると

それに合わせて勝手に腰が動くのだ。

あーん
あーん
あーん

差分多数あり♡

km